

2. 中学2年

インタビューと体験学習から学ぶ「ゴミとリサイクル」

今村 敦司・三小田 博昭
高須 明・山岸 郁子

【抄録】 中学2年生総合人間科「ゴミとリサイクル」の授業報告。学校のゴミ回収方法の変化や藤前干潟の問題等、生徒に直接関係のある身近な問題を切り口に、現状を調べる。また、リサイクル活動を体験することで、今後の課題を解決することの難しさを実感し、一人の人間として、環境に対する考えや行動、態度を育てるきっかけとしていく。

【キーワード】 ゴミとリサイクル、身近、体験

I. 学年テーマについて

一年間の総合人間科の取り組みを終え、その授業の基礎である「自分で物事を調べる方法」、「フィールドワーク先の検索方法と、依頼状、お礼状の書き方」、そして、「発表と研究集録のまとめ方」を学んできた中学2年生は、今年度いよいよ個人研究に取り組むことになる。「生命と環境」という幅広いテーマの中から自分の興味関心のあるテーマを一つ選ぶという作業は、それだけで十分時間をかけることが重要である。ここで興味のないテーマを選ぶと、年間を通して学習意欲が継続しない。また、生徒にとって難し過ぎるテーマを選んでしまうと、理解の「消化不良」を起こしてしまうからである。生徒と教師の何度かのやりとりの中で、慎重に決めていかなければならない。今後、高校まで個人研究をしていくことになる生徒にとって、自分の身近にある問題を切り口にしてさらに深めていくことができるテーマを教師がどのように提供していくかが、生徒のやる気に重要な影響するのである。

今回、「ゴミとリサイクル」という、より環境面に絞ったテーマを設定した理由は次の二つである。

一つは、今年度から本校のゴミの収集方法が今までの一括収集から、細かな分別収集になったことである。また、ゴミを業者に集めてもらっていることから、ゴミ自体も減らす必要が生じてきたことあげられる。生徒は今まで、分別することもなくゴミをゴミ箱へ捨ててきたが、教職員を始め本校へ通う全生徒がゴミの分別収集に取り組まなければならなくなったのである。

もう一つは、名古屋市ゴミ処分場の候補地である藤前干潟の保護の運動が活発になってきたことである。(実際にこの年度途中で、名古屋市は藤前干潟の

ゴミ処分場建設を断念している。)

この二つの点から、生徒たちは普段の学校生活で、より身近にゴミについて考えなければならなくなった。そこで、このことを切り口にして、生徒それぞれが、なぜこのようなことになったのかについて深く考えるのに適したテーマであると考えて設定することとした。

総合人間科の授業で「ゴミとリサイクル」を扱うに当たって注意した点は、あくまで行動を強制させるために取り組ませるのでなく、生徒個人が「ゴミとリサイクル」について、自分なりの考えを持って行動できるための機会を設けたいということである。自分自身で考えたことと体験を結びつけることは、生徒の心に深く刻まれる経験となる。この経験が、将来大人としてこの問題にどのように対処していくかという態度に、少なからず良い影響を与えるものであると考え、このテーマを設定したのであり、この授業をすることにより、すぐに校内のゴミが激減することを期待しているわけではない。しかし、ゴミがどのように処理され、その結果がどのような問題になって私たちの身近に存在しているのかとか、リサイクルに協力すべきなのは頭でわかっているのに、なぜうまく進まないのかとかの問題に対して、実際にリサイクル活動を体験することにより、その理由を自分の問題として実感することとができると考え、このテーマに絞ることとした。

II. 学習方法と指導体制について

1. 学年の目標

今年度の「ゴミとリサイクル」というテーマに対し、以下のような学年目標を立てた。

- ・ 地球的規模の問題と個人の問題といった違う視点で物事を見る力を養う。

2. 中学2年 インタビューと体験学習から学ぶ「ゴミとリサイクル」

- ・ 聞く人にわかりやすい発表方法の工夫をする。
- ・ 得た知識をもとに体験することにより、自分の考えを深める。
- ・ 社会の動きに目を向け、自分中心の行動を見直す機会とする。
- ・ 自分の取り組みに対する素直な反省と評価をする態度を育てる。

2. 学習方法と指導体制

指導は2年生担任団全員で行った。

①. 学習の流れ

一年間を、次のような流れで取り組んだ。

1学期：個人研究テーマ設定と動機付け

動機付け

- ・ ビデオ教材の鑑賞
- ・ 担任団による環境問題のレクチャー
- ・ 環境問題を集めた冊子の制作

個人研究テーマ設定

- ・ 時間をかけた担任団のアドバイスを受けながらのテーマや研究計画の決定
- ・ 本やインターネットによる資料の収集
- ・ 今すぐできる実践の検討

夏休み：実践と野外学習

実践

- ・ 各家庭での資源ゴミのリサイクル等環境を守る活動の実践

野外学習

- ・ 林間学校での環境学習（上高地や観光地の自然を守る取り組みを知る）

2学期：フィールドワークと発表

フィールドワーク

- ・ フィールドワーク先の検索と依頼（担任団とやりとりをしながら）
- ・ 依頼状の準備と発送・質問の準備
- ・ インタビューとまとめ・お礼状の準備と発送発表
- ・ 夏休み実践の準備と発表
- ・ 個人研究発表の準備と発表（研究集録に載せる内容もあわせて検討する）

3学期：研究集録執筆、体験学習と一年のまとめ

研究集録執筆

- ・ 参考にした本やインターネットの資料、フィールドワークのインタビュー、体験学習などを参考に研究集録を執筆

体験学習

- ・ 社会で作られつつあるリサイクル活動を4つの班に分かれて体験

一年のまとめ

- ・ 一年間の自己評価と他人による評価のまとめ

②. 前年度の同学年との違い

前年度の同学年の総合人間科の授業と違うのは、次の二点である。

一つは、体験学習の機会を増やしたことである。自分でできることを夏休み実践として行い、3学期に社会で既実践されている活動の手伝いをするので、一人一人が意識して行動を起こさなければ、この問題は解決しないこと、しかし、なかなかみんなの協力が得られないという現状、そして、自分自身を含んだ人類の今後の課題などについて考える機会となった。

二つ目は、それぞれの活動が一区切りするたびに、自己評価とその理由を記録したことである。また、可能な限り他人による評価をしてもらい機会も設けた。教師は生徒の時に全体や個々の生徒に対して短いコメントをして、評価を伝えた。3学期のまとめの時も数字と文章で評価し、自己評価と他人による評価を総合して個人の評価とした。これにより、自分に厳しく取り組みができるようになり、教官や他の生徒による評価で、自分自身の取り組みの自信になったり、改善することができるようになったりした。

③. この学年の昨年度からの発展

冒頭に述べたとおり、生徒たちは総合人間科の基礎的な事項は一通り経験したので、インタビュー相手への依頼、交通手段等の検索、取材、お礼状の作成と発送、発表などを手際よくこなしていった。その中で、特に今年度考えさせたのは、発表方法の改善である。1年生の時の発表はB紙等にいろいろな事項を書いて発表し、感想を述べるというものであったが、今年度は、話を聞く側の立場に立って、わかりやすい発表になるように工夫することを要求した。これは、発表するとき初めてどのように発表するかを考えていては遅いので、インタビューの時

も写真を撮ったり資料をもらったりしなければなら
ないことになるなど、発表以外の場面でも意識の変
化があった。

Ⅲ. 取り組み

《4月18日(土)》

今年度の総合人間科テーマについてのガイダンス
を聞き、環境問題について今知っていることを確認
した。授業参観であり、保護者にも総合人間科の一
年間のテーマについて理解していただく機会とした。
(学年全体で学習、担任団による指導、自己評価実施)

《4月23日(木)》

ビデオ「中学生によるゴミ体験」(毎日ビデオライ
ブラリー)を鑑賞し、中学生のもゴミ問題に取り組
むことができることを考えた。
(学年全体で学習、担任団による指導、自己評価実施)

《5月2日(土)》

本校の学校行事である憲法講演会で「環境と平和」
という伊藤孝氏の講演を聴いた。
(学校全体で学習、講師による講演、自己評価実施)

《5月16日(土)》

ビデオ「未来からの電子メール」と担任団の教師
からの話(「地球温暖化について」、「地球環境問題に
ついて」、「地球の砂漠化問題について」、「ゴミとリ
サイクルの問題について」)から、環境問題の現状を
知った。
(学年全体で学習、担任団による指導、自己評価実施)

《5月30日(土)、6月6日(土)》

ゴミとリサイクルの問題をまとめた冊子「ゴミと
リサイクル何でも一覧」を作成した。二人一組とし
て一つのテーマを担当して、全体で39のテーマを
載せた。
(各クラスで学習、担任団による指導、6月6日に自
己評価とペアによる評価を実施)

《6月20日(土)》

冊子やビデオ、担任団の話等から、個人研究テ
ーマを考え、年間研究計画や夏休み実践計画をたて、
資料やフィールドワーク先の検索等を行った。
(各クラスで学習、担任団による指導、自己評価実施)

《7月4日(土)》

個人研究テーマ、夏休み実践計画、年間研究計画
を決定し、発表する準備を行った。

(各クラスで学習、担任団による指導、自己評価実施)

《7月16日(木)》

個人研究テーマ等の発表会を行った。
(各クラスで学習、担任団による指導、自己評価と他
の生徒による評価を実施)

《夏休み中》

ゴミとリサイクル等環境を守る活動の実践を行い、
レポートにまとめた。
・家庭の資源ゴミをリサイクル拠点に持っていく実
践
・牛乳パックからはがきを作る実践
・ケナフを育てて紙を作る実践
・家庭の物を詰め替えパックの商品に切り替える実
践
・衣類をリフォームする実践
・節電・節水の実践
・ゴミを拾ったり分別をする実践
など、様々な実践が行われた。
(各自で学習、自己評価と保護者による評価を実施)

《7月29日(水)》

林間学校の環境学習として、上高地ビジターセン
ターの所員の方に上高地の自然を守る取り組みの話
を聞いた。また、乗鞍高原温泉のペンションのオー
ナーから、観光地の自然を守るために観光地を訪れ
る人に協力してもらいたいことの話聞いた。
(学年全体で学習、講師による講演、自己評価実施)

《9月5日(土)》

夏休み実践の報告会の準備をすると同時に、各生
徒のフィールドワーク先の検討を行った。
(各クラスで学習、担任団による指導)

《9月19日(土)》

夏休み実践報告会を行い、同時にフィールドワー
ク先の検討も行った。
(各クラスで学習、担任団による指導、自己評価と他
の生徒による評価を実施)

《10月3日(土)》

フィールドワーク先を決定して依頼状を作成し、
インタビューの項目や交通手段の検討を行った。
(各クラスで学習、担任団による指導、自己評価実施)

《10月10(土)、17日(土)、19日(月)、27日(火)、29日
(木)、30日(金)、31日(土)、11月5日(木)》

訪問先の都合により上記の8日間にわたってフィ

2. 中学2年 インタビューと体験学習から学ぶ「ゴミとリサイクル」

2年総合人間科訪問先一覧

組	番号	氏名	日時	研究テーマ	訪問先	場所
A	1	安部 良	10/31②	分別回収	緑環境事業所	緑区鳴海町太白
A	2	伊勢 仁美	10/30⑥	様々なリサイクル	中部リサイクル運動市民の会	東区徳川町
A	3	伊勢 博人	11/5⑥	埋め立て	名古屋市役所公害対策課	中区三の丸市役所本庁舎
A	4	枝元 一将	10/30⑥	ダイオキシンの発生原因	千種保険所	千種区覚王山通
A	5	川崎裕一郎	11/5⑥	埋め立て	名古屋市役所公害対策課	中区三の丸市役所本庁舎
A	6	鬼頭麻衣子	10/31②	水のリサイクル	名古屋下水道科学館	北区名城 名城下水道処理場
A	7	清原 菜那	10/29⑤	自動車の排気ガスについて	トヨタカローラお客様相談センター	東区泉1丁目トヨタカローラ本社
A	8	小島 英剛	10/29⑤	ダイオキシンの発生原因	春日井市役所	春日井市鳥居松
A	9	佐々 友美	10/17②	分別ゴミ	名古屋ドーム	東区太幸
A	10	佐藤 友則	10/29⑤	地球温暖化の原因について	春日井市役所	春日井市鳥居松
A	11	佐藤 充	11/5⑥	埋め立て	名古屋市役所公害対策課	中区三の丸市役所本庁舎
A	12	城山 英之	11/5⑥	埋め立て	名古屋市役所公害対策課	中区三の丸市役所本庁舎
A	13	杉浦 史恵	10/19⑥	詰め替えバック容器再利用	ライオン㈱名古屋支店	中区丸の内
A	14	高岡 亜衣	10/31②	商品包装の現状と対応	イトーヨーカドー小牧店	小牧市小牧3丁目
A	15	竹内 裕子	10/29⑤	商品包装の現状と対応	イトーヨーカドー鳴海店	緑区浦里
A	16	谷 花菜子	10/29⑤	排気ガスの削減	豊田中央研究所	長久手町
A	17	玉田 葉月	10/31②	洋服のリフォーム	クロス技研八事本店	天白区八事石坂
A	18	中野 雅美	10/31②	水のリサイクル	名古屋下水道科学館	北区名城 名城下水道処理場
A	19	中村沙弥香	10/29⑤	レンズ付きフィルムのリサイクル	富士フィルム名古屋支店	中区栄2丁目商工会議所ビル
A	20	中村 浩之	10/29⑤	観光地の環境とゴミ対策	東山動植物園	千種区東山本町公園事務局長建設課
A	21	中村真梨子	10/29⑤	廃家電製品のこれからと今	市環境事業局減量推進室	中区三の丸市役所本庁舎4F
A	22	長谷川弘幸	10/29⑤	排水	鳴海下水道処理場	緑区浦里
A	23	服部 陽佐	10/29⑤	排気ガスとアイドリングカット	JAF広報部	昭和区滝子29
A	24	堀内 綾乃	10/31②	路上のゴミ	環境活動家水野とみ江様	瑞穂区北原町1-7-4水野様宅
A	25	松岡 本樹	10/29⑤	観光地の環境とゴミ対策	東山動植物園	千種区東山本町公園事務局長建設課
A	26	水野 雄史	10/30⑥	ダイオキシンの発生原因	千種保険所	千種区覚王山通
A	27	宮野 聖史	10/30⑥	ダイオキシンの発生原因	千種保険所	千種区覚王山通
A	28	三好 和康	10/30⑥	戦争廃棄物	守山自衛隊	守山区守山東山
A	29	室梅 秀平	10/31②	地球温暖化現象について	名古屋大学工学部	工学部4号館1F109号
A	30	安庭 麻美	10/29⑤	アイドリングカット	名古屋大学施設部設備課	本部施設部設備課
A	31	山口 竜生	10/31②	様々なリサイクル	名古屋リサイクル推進センター	西区浄心1丁目シテイファミリー浄心2F
A	32	山田 花海	10/31②	ガラスびんのリサイクル	大原ガラス名古屋支部	岩倉市北島町中ノ田
A	33	山田 涼子	10/29⑤	排気ガスの削減	豊田中央研究所	長久手町
A	34	山根 綾子	10/31②	様々なリサイクル	名古屋リサイクル推進センター	西区浄心1丁目シテイファミリー浄心2F
A	35	山邊 真里	10/31②	水のリサイクル	名古屋下水道科学館	北区名城 名城下水道処理場
A	36	山本 無以	10/30⑥	戦争廃棄物	守山自衛隊	守山区守山東山
A	37	横田 憲昭	11/5⑥	埋め立て	名古屋市役所公害対策課	中区三の丸市役所本庁舎
A	38	吉田 早希	10/27⑥	レンズ付きフィルムのリサイクル	コニカマーケティング名古屋支店	中区栄2丁目名古屋広小路ビル
A	39	吉野 良	10/31②	地球温暖化現象について	名古屋大学工学部	工学部4号館1F109号
B	1	浅野 貴裕	10/29⑤	ダイオキシンの発生原因	豊田市役所環境部環境政策課	豊田市西町3丁目豊田市役所
B	2	阿部 真	11/5⑥	核のゴミ処理	中部電力本社	東区東新町1
B	3	飯島あゆみ	10/30⑥	オゾン層の破壊	名古屋大学理学部	理学部太陽地球系科学講座
B	4	石田百合子	10/31②	買い物袋持参運動	ヤマナカ千代が丘店	千種区千代が丘5
B	5	磯部 真与	11/5⑥	埋め立て地	名古屋環境学習センター	中区栄1-23-13伏見ライフプラザ13F
B	6	磯部めぐみ	10/17②	分別ゴミ	名古屋ドーム	東区太幸
B	7	伊藤 知絃	10/29⑤	ダイオキシンの発生原因	豊田市役所環境部環境政策課	豊田市西町3丁目豊田市役所
B	8	伊藤 悠起	10/29⑤	粗大ゴミの処理	名古屋市役所廃棄物指導課	中区三の丸名古屋市役所
B	9	稲垣 敬悟	10/29⑤	地球温暖化の原因について	春日井市役所	春日井市鳥居松
B	10	浦野 千春	10/29⑤	自動車の排気ガスについて	トヨタカローラお客様相談センター	東区泉1丁目トヨタカローラ本社
B	11	金子 恵介	10/29⑤	自動車の環境を守る工夫	トヨタ自動車本社	豊田市豊田町1豊田会館
B	12	河合 晴子	10/31②	様々なリサイクル	名古屋リサイクル推進センター	西区浄心1丁目シテイファミリー浄心2F
B	13	川本 真実	11/5⑥	核のゴミ処理	中部電力本社	東区東新町1
B	14	黒田 葉子	10/31②	様々なリサイクル	名古屋リサイクル推進センター	西区浄心1丁目シテイファミリー浄心2F
B	15	近藤 宏和	10/29⑤	地球温暖化の原因について	春日井市役所	春日井市鳥居松
B	16	坂井田 淳	10/10	おもちゃのリサイクル	南区生涯学習センター	南区東又兵衛町南区社会教育センター
B	17	鈴木 あや	10/30⑥	オゾン層の破壊	名古屋大学理学部	理学部太陽地球系科学講座
B	18	竹田久美子	10/19⑥	詰め替えバック容器再利用	ライオン㈱名古屋支店	中区丸の内
B	19	田中 翔子	11/5⑥	埋め立て地	名古屋環境学習センター	中区栄1-23-13伏見ライフプラザ13F
B	20	田中 拓	10/29⑤	ダイオキシンの発生原因	豊田市役所環境部環境政策課	豊田市西町3丁目豊田市役所
B	21	土屋 優佳	10/31②	生活汚水について	名古屋女子大学家政学部	瑞穂区沙路町家政学部本館403
B	22	綱木 真人	10/29⑤	自動車の環境を守る工夫	トヨタ自動車本社	豊田市豊田町1豊田会館
B	23	寺田智香子	10/29⑤	海洋汚染	環境保全センター	港区港陽
B	24	土岐 明寛	10/29⑤	粗大ゴミの処理	名古屋市役所廃棄物指導課	中区三の丸名古屋市役所
B	25	永井 穂子	10/27⑥	レンズ付きフィルムのリサイクル	コニカマーケティング名古屋支店	中区栄2丁目名古屋広小路ビル
B	26	中嶋 健人	10/29⑤	アイドリングストップ&スタートシステムバス	名古屋市交通局自動車部計画係	名古屋市役所西庁舎10F
B	27	中野 慎也	10/29⑤	粗大ゴミの処理	名古屋市役所廃棄物指導課	中区三の丸名古屋市役所
B	28	南塾真奈美	11/5⑥	埋め立て地	名古屋環境学習センター	中区栄1-23-13伏見ライフプラザ13F
B	29	西村幸一郎	10/29⑤	アイドリングストップ&スタートシステムバス	名古屋市交通局自動車部計画係	名古屋市役所西庁舎10F
B	30	野口 舞	10/29⑤	アイドリングカット	名古屋大学施設部設備課	本部施設部設備課
B	31	羽藤柳一郎	11/5⑥	核のゴミ処理	中部電力本社	東区東新町1
B	32	原 康晃	10/29⑤	自動車の環境を守る工夫	トヨタ自動車本社	豊田市豊田町1豊田会館
B	33	藤嶋ゆみえ	10/31②	買い物袋持参運動	ヤマナカ千代が丘店	千種区千代が丘5
B	34	三谷 明子	10/31②	生活汚水について	名古屋女子大学家政学部	瑞穂区沙路町家政学部本館403
B	35	森本 拓	11/5⑥	核のゴミ処理	中部電力本社	東区東新町1
B	36	諸永 成紀	10/29⑤	自動車の環境を守る工夫	トヨタ自動車本社	豊田市豊田町1豊田会館
B	37	山下 真由	10/19⑥	ペットボトルリサイクル	リサイクル活動家太田和子様	幡豆郡吉良町太田様宅
B	38	横井 正行	10/31②	様々なリサイクル	名古屋リサイクル推進センター	西区浄心1丁目シテイファミリー浄心2F
B	39	吉岡めぐみ	10/19⑥	ペットボトルリサイクル	リサイクル活動家太田和子様	幡豆郡吉良町太田様宅

ールドワークを行った。

(各自で学習、訪問先の担当者のインタビュー)

《11月7日(土)》

フィールドワークの反省と、お礼状作成、発送、個人研究発表の準備を行った。

(各クラスで学習、担任団による指導、自己評価実施)

《11月2日(土)、26日(木)、12月3日(土)、5日(土)、10日(木)》

個人研究発表会を全体で行った。B紙での発表のほか、写真や実物の展示、実演などの発表もあり、昨年度と比べて、より工夫を凝らした発表が多かった。(学年全体で学習、担任団による指導、自己評価と他の生徒による評価を実施)

《1月16日(土)、30日(土)》

研究集録の書き方の説明と執筆を行った。

(各自で学習、担任団による指導)

《2月6日(土)》

体験学習のガイダンスを受けて、その後研究集録の執筆を続けた。

(学年全体で学習した後、各自で学習、担任団による指導)

《2月18日(木)》

4カ所に分かれて体験学習を行った。

① 名大附属中学校に講師を招き、家庭で廃油とな

IV. 生徒の感想と変容、考察

1. 生徒の感想

「この一年間の総合人間科の授業は、私にとって、実になったか、と言うと、大変楽になりました。今まで、環境と言っても、そんなに近くに感じられなかったけれど、一年、環境について勉強して、それがどれだけ大切な欠かせないものか、という事がとてもよく分かった。自分の普段している行動の中にも、環境を汚くする事があつた……とか、色々気を配らないといけない事が思い当たった。二年になって、勉強する度に、「あ、これはこんな事があつたんだ。じゃあこれからはこうする様にしよう。」とか思った。でも、なかなかそれを実行に移す事ができなかったけれど、最近、少しずつ「水は使う時以外出さない」とか、「なるべくゴミを捨てて多くしない様にする」等の事を気を付ける事が出来る様になった。これからは、私達が生きていくのに大切な環境を出来る限り守っていかうと思います。」

った天ぷら油から石鹸を作る実習と、牛乳パックからいすを作る作業を行った。

② 名大生協に行き、紙、ペットボトルの分別、回収した牛乳パックの整理を行い、食堂の残飯をたい肥にするコンポストを見学した。

③ 東海市の文化センターに行き資源ゴミ収集日のビン、カン、ペットボトル等の分別を手伝い、東海市の焼却炉を見学した。

④ 豊田市にあるオイスカというNGOの施設に行き、たい肥の作り方を学び、畑に散布するのを手伝った。また、発展途上国の農業の現状について話を聞いた。

(グループ別で学習、担任団と体験学習先の担当者による指導、自己評価実施)

《2月20日(土)》

研究集録の残りを執筆し、清書を完成させた。

(各自で学習、担任団による指導、自己評価実施)

《3月6日(土)》

一年間のまとめと反省をして、今までの自己評価と他人による評価の確認を行った。

(各クラスで学習、担任団により指導)

・4月の時点で「私は環境問題が全然わかりませんでした。ビデオを見たり、資料を見たりして実態がわからなくても「まさかあ」とずっと思っていました。でも自分で調べていくうちに「やっぱり、大変なことなんだ」と思い始めました。そして色々なことがわかりました。わかったことの中で一番印象に残ったのは、「人だけ努力してもダメ。みんなが努力しないと意味がない。反対にみんなが一生懸命やっているのに1人でもそれを台無しにする人がいれば意味がない」ということです。本当にその通りだと思います。環境問題はこれから私達が一生涯付き合っていくかなきゃいけないと思います。だからこれ以上は悪化させない様にしていきたいと思います。そして、もっと住みやすい地球環境にしていきたいです。

一年生の時の総合人間科もすごく勉強になりましたが、二年生の総合人間科は去年とはちがった学び方で勉強になりました。

・一年間...も過、たんどすねえ。長い道のりでした。自己満足は全然でまませんね。あまりまじめに取り組んでいない所があらほら見られたの。けれど、いい勉強にはなりました。店で再生品が売ってたりすると、つい目がいってしまったり。再生紙使用のメモ帳やノートを見て、うれしくなって買ってしまったり。いろいろなムダ使いをしながら、変化が見られこいます。家族も少しはリサイクルに協力してほらしい。ちらかし専門の人もいますか...。リサイクルってけっこう手間がかかると思ってたんどすねえ。ちかうんですることだったのに、ちかおと自身、あまり苦になら自分からリサイクルです。親は不思議な顔をひといいてすよ。まあ、之活動にこいまたりとあわり。



- 私は、2年の最初に、オゾン層破壊のことに興味を持ちました。しかし、本を読んだだけで満足していません。地球の温暖化や酸性雨など、環境破壊の問題は、単に科学的な知識だけでなく、人間の生活や経済活動と深く結びついています。そのため、環境問題を解決するには、科学的知識だけでなく、政治的・経済的・社会的な側面からのアプローチが必要です。

また、環境問題の解決には、政府や企業だけでなく、市民一人ひとりの意識的参加が不可欠です。例えば、ゴミの分別やリサイクルの促進、省エネ行動の取組などが、環境保護に大きく貢献しています。

私は、環境問題の解決に向けて、今後も引き続き研究と実践を続けていきます。また、市民への啓発活動にも積極的に参加し、環境意識の向上を図りたいと考えています。

・私が一年間ダイオキシンの問題について調べてみて、思ったことは、今まで便利に生活するためにしてきた環境破壊などのことだが、大きな災いとなって人間の身にふりかかっているということです。

それはダイオキシンだけでなく、砂漠化、オゾン層の破壊などと同様です。これらのことを考えると、人間は実際に害が出るまでには環境を破壊していることや、人体を蝕まれていることに気が付かないのだということが分かります。悲しいことですが、これが現実だと思えます。だから、最も重要なことは、そのことに気が付いたら被害を出さない限りは、とどめることだと思えます。未然に防ぐことが出来ないならばそれしかありません。

もう一つ分かったことがあります。それは、消費が美德であった時代は終わったということです。現在は限りある資源をどう守っていくという動きが強いので昔ほどではないようです。ゴミを出さないというのには、最も効果的なダイオキシン防止方法だとも思いますが、さすがに現代人にはそれは無理だとも思いますが、ゴミの量を減らしたり、有害物質を取り除くものを使うなど、いろいろ試みていることは嬉しいことです。人間一人ひとりが実践できれば、環境破壊の防止にもなるし、人体への悪影響も減らせます。いま、環境破壊の防止には、ゴミの分別方法を厳しくするだけでなく、面創がかわるのには、いかにして環境意識を醸成していくか、という点も重要です。

2. 中学2年 インタビューと体験学習から学ぶ「ゴミとリサイクル」

体験学習でもいろいろ考えさせられました。特に、1107アニューギニアでのオースカのかたの活動を見て思ったのですが、あそこでは物を粗末にできるのか、ゴミはたくさんでるのかということだと思います。おそらくNOだと思います。なぜなら、1107アニューギニアには日本ほど物がありふれていないだろうからです。それほど物が多くなければ、自然にそれを大切にしようという心が芽生えてくるだろうからです。そもそも、昔は人間なんて狩猟と採集の生活を送っていたわけだから、その道具以外はたいてい必要ないのではないかと思います。それを思うと、現代人の生活は、命を削って便利さを得ているという感じがしなくもないのですが。



- 1年間、「環境問題」をテーマにいろいろと研究してみても、人間が自然をこわしている現実。それに、環境問題対策がいかに大切か、というところがよくわかった。私は普段、ほとんどニュースや新聞を見たり読んだりしてないので、今まで環境問題の知識はほとんどなかったし、環境問題対策を行なったこともなかった。この1年でずいぶん自分自身知識も増えたし、環境に対する考えも変わった。今回は「買い物袋持参運動」についてくわしく調べ、実際にやってみたが、これからは、買い物袋持参運動だけでなく、できる限りのたくさん環境問題対策を行っていきたいと思う。

2. 生徒の変容と考察

これらの感想から、生徒は今まで無関心であった環境問題が、実は自分の普段の行動にまで深く関係しているというように、大変身近であり、なおかつ重要な問題であると理解していることがわかる。そして、一人の力だけでは十分でないので、みんなが協力をしていかなければならないが、体験学習によって、みんなが協力してくれるのはなかなか難しい状況があるということと、その上でやはり一人からでも自分の行動を見直して行くべきだと考えて、行動に移している生徒もいることがわかる。自分の環境に対する考えの基礎が形成されている様子がうかがわれる。

また、自分で苦勞して調べたことが、とても自分の心に残っているという生徒もいた。あまり興味がなかったり、最初は全く知らなかったことでも、苦勞して調べているうちに、より深く知りたくなり、インタビューをするときには次々と疑問がわいてきて、質問するようになってきたり、体験学習では難しくてもめんどくさいと思っていたリサイクル活動が、実はそんなに難しいことではないことを知り、協力する気になったという。このことは、「知らない」ということが問題なのであるが、知る必要のある知識を獲得する方法も重要であることを物語っている。ただ単に、教室で教科書や参考資料で指導するだけでは興味を示さなかった内容のものも、自分で調べ、体験するような形で学習することにより、深く身につけることができるようになるのである。特に「ゴミとリサイクル」の問題は最後に自分自身の行動が問われるような性格のものなので、こうした学習方法を採用することが効果的であると考えられる。

環境学習をして、社会がよく見えてきた生徒もいた。「いくつかの企業は、環境に対していろいろよく考え、対策をしていることを知った」と感想に書いた生徒は、ファーストフードの過剰包装の異常さに気がついている。また、ある生徒は「使い捨てカメラは、実は捨てられているのではなく、ほとんどそのまま再利用できるリサイクル優等生である」ことを知った。他にも、詰め替えパック商品の存在意義を追求し、家庭で進んで購入するように働きかけている生徒が出てくるなど、社会の動きに敏感に目を向けている生徒の様子が分かる。

また、保護者会のおりに、ある生徒の母親は、「今まであまり外へ遊びに行くことがなかったのに、フィールドワークの時は、自分一人で交通経路をしっかり調べてインタビューをして帰ってきたのに驚き、自分の息子の成長を目の当たりにした思いです」と感想を漏らした。この生徒が今まで外で遊んだ経験

がないということは、教師側は全く知らなかったことで、フィールドワーク先も自分で探してきて、交通経路の確認をしたときでも必要な情報はほとんどそろえていたので、何も問題ないと思っていたのである。母親にしてみれば、一人で無事にフィールドワークを行ったこと自体が感激に値することであり、これを機会に総合人間科の授業に対しての理解を深めていただくことができた。教師が最低限必要なこと以外は教えないでアドバイスに徹することが、総合人間科にとって大切であることを改めて認識した。

V. 今後の課題

1年生、2年生と形を変えて総合人間科に取り組んできた生徒は、その基本と個人研究の方法については、だいたい理解できたようである。しかし、自分の考えを深めて発表し、他人の考えを評価することはできても、他人に意見や反論を言う「討論」ができるまでには至らなかった。他人に意見を言い、自分も意見を言われることにより、それぞれの意見を違った視点で見ることができ、最終的にはそれぞれの考えが深まるというような経験をする必要がある。このことは、来年度の大テーマである「平和と国際理解」の学習でぜひ行う必要がある。それぞれの個人研究テーマは違っても、根本的には「平和と国際理解」を通じているはずなのでその部分で討論がかみ合うはずであるからだ。

フィールドワーク先の発掘も重要である。今回は、山岸先生というNGO活動に通じている教師がいたおかげで、すばらしい体験学習先を見つけることができたが、県や大都市の環境対策担当者に連絡を取っても、思うような体験学習をさせてもらえるところがなかっただけに、民間団体の活動のすばらしさを感じると共に、協力的な態度に感謝している。しかし、今後、生徒の研究テーマの多様化に対応するには、教師の知るところだけでは不十分である。名古屋大学という総合大学の中に学校があるという点はインタビュー先の多様化に対応できるのが幸いだが、さらに多くの場所を開拓するには保護者の協力が不可欠である。今回のフィールドワークでも、生徒の保護者の勤め先や知り合いのところにインタビューに出かけたものもいた。生徒の保護者がこのように総合人間科の授業に協力をしていただけるように、「スクールボランティア」の登録を進める必要がある。そのためにはまず、保護者にも総合人間科の授業を知っていただくなくてはならない。今後は、1年生の時に「友達の親に生き方をインタビューしよう」というフィールドワークをしたときのように、保護者も巻き込んだ形での授業のあり方も検討する必要があると考える。